

ミャンマーにおける日本語フリーペーパー

大阪大学大学院 菊池泰平

ミャンマーにおける日本語フリーペーパーリスト

媒体名：ミンガライフ／MINGALIFE

出版年：2012年創刊、2014年10月廃刊

出版者：ミンガライフ編集局

出版地：—

判型：—

刊行頻度：年3回

ウェブ：—

媒体名：I LOVE YANGON

出版年：2013年4月創刊

出版者：株式会社グラウディングラボ

出版地：日本（東京）

判型：—

刊行頻度：—

ウェブ：<http://www.iloveyangon.info/backnumber.html>

媒体名：Hello!! YanGon／ハローヤンゴン

出版年：2013年春

出版者：クラウンライン

出版地：ベトナム（ホーチミン市）

判型：天地26cm

刊行頻度：—

ウェブ：<https://incn.crownline.jp/media/helloyangon/>

媒体名：Yangon Press／ヤンゴンプレス
出版年：2013年5月創刊、2021年5月休刊
出版者：Yangon Press Asia Co. Ltd.
出版地：ヤンゴン
判型：天地 39cm
刊行頻度：創刊時は隔月、後に月刊
ウェブ：—

媒体名：MYANMAR JAPON／ミャンマー・ジャポン
出版年：2013年6月創刊
出版者：Myanmar Japon Co., Ltd
出版地：ヤンゴン
判型：天地 30 cm
刊行頻度：月刊
ウェブ：<https://myanmarjapon.com/>

媒体名：KANARAY／カナリー
出版年：2014年1月創刊
出版者：—
出版地：—
判型：天地 26cm
刊行頻度：隔月刊
ウェブ：—

媒体名：ミャンガイ
出版年：2014年6月創刊
出版者：Sagittarius Myanmar
出版地：ヤンゴン
判型：天地 19cm
刊行頻度：月刊
ウェブ：—

媒体名：「Myan Myan」GUIDEBOOK
出版年：2015年2月創刊
出版者：Maeken Myanmar
出版地：ヤンゴン

判型：天地 30cm

刊行頻度：月刊

ウェブ：—

媒体名：ミャンジャポ！

出版年：2017年3月、2018年11月をもって廃刊となり、『MJ ビジネス（現ミャンマー・ジャポン）』に吸収合併された。

出版者：Myanmar Japon Co., Ltd

出版地：ヤンゴン

判型：B4 変形

刊行頻度：月刊

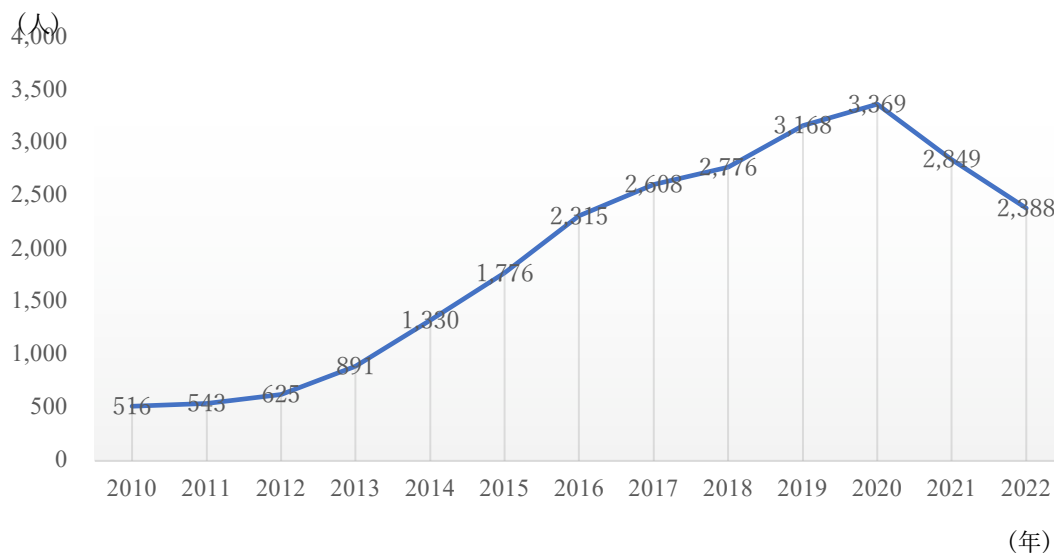
ウェブ：<https://myanmarjapon.com/myanjapo>

ミャンマー最大都市ヤンゴンでは、近年、日系オフィスのロビーやホテルで日本語フリーペーパーを見かける機会が増えた。この動向は、ミャンマーにおける日本人コミュニティの拡大と相関関係にある。ここでは、2011年の民政移管後に発行された日本語フリーペーパーを俯瞰してみたい。

2008年に制定された憲法のもとで、2011年にテイン・セイン大統領（当時）が就任し、民政移管が果たされた。大きな体制変革はないだろうという人々の予想に反して、テイン・セイン政権下では大幅な体制改革が行われ、政府主導による民主化、国民和解のプロセスが始まった。こうした背景のもと、日本でも「アジア最後のフロンティア」と呼ばれたミャンマーには、日系企業が急速に進出した。

在留邦人数の推移は、その変化を最も顕著に示している。2010年10月1日時点の在留邦人数は516人であった。その後、2013年ごろから伸び始め、2020年10月1日

ミャンマー在留邦人数の推移(2010-2022)



時点には3,369人まで増加した（下グラフ）¹。

長期滞在者や、観光や出張目的の短期滞在者を読者層として、2013年ごろからフリーペーパーの刊行が相次いだ。管見の限り、2011年以降で最初に発行された日本語フリーペーパーは、2012年創刊の『ミンガライフ/MINGALIFE』である。発行者はミンガライフ編集局で、年3回刊行されたが、第8号（2014年10月）をもって廃刊となった。

しかし、より多くの日本語フリーペーパーが発行されたのは2013年であった。この年、『I LOVE YANGON』、『Hello!! YanGon/ハローヤンゴン』、『Yangon Press/ヤンゴンプレス』、『MYANMAR JAPON/ミャンマー・ジャポン』の4誌が創刊された。4月に創刊された『I LOVE YANGON』は、出版地は東京であるものの、現地で配布された。最大都市ヤンゴンに関する情報を中心に、ビザの取得方法や、渡航上の注意、地図、滞在先のホテル・レジャー・医療機関に関する情報を掲載した。発行者は、エンターテインメントプロデュースを取り扱う株式会社グラウディングラボである²。

『Hello!! YanGon/ハローヤンゴン』も、同年春に創刊された（出版地ホーチミン、天地26cm、冊子体）。こちらも出版地はベトナムのホーチミン市となっているが、ヤンゴン市内主要レストラン、ホテルなどで配布された。内容は、ホットトピック、ナウな会社、ヤンゴンMap、レストラン情報、突撃！！ローカルグルメ、ヤンゴンの住宅事情、ヤンゴンの不動産物件、ミャンマー医療相談室、ミャンマーの通信事情、ショッピングスポット、ミャンマー観光情報（バガン遺跡）、スポーツ情報（ミャンマーゴルフクラブ）、ミャンマー体験記（銀行口座を開設）、クラシファイドである（創刊号の目次より）³。発行者は、クラウンラインという海外引越し業者であり、ハローシリーズとしてタイ版、マレーシア版、シンガポール版の出版・販売も行っている。

5月には、『Yangon Press/ヤンゴンプレス』が創刊された（出版地ヤンゴン、天地39cm、冊子体）。もともと隔月で発行されたが、のちに月刊になった。誌面の内容は、ミャンマーの飲食店や不動産情報、一般ニュース、観光に関するもので、ヤンゴン市内のホテルや空港、マンダレーやバガンといった日本人観光客が多く訪れる場所で配布された。編集・発行者はYangon Press Asia Co. Ltd.で、創刊者は日本での執筆活動を経て2011年にヤンゴンを訪れた栗原富雄氏（Yangonn Press 現編集長兼

¹ 外務省『海外在留邦人数調査統計』平成22年(2010年)10月1日現在—令和4年(2022年)10月1日現在

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/index.html>（2023年3月31日最終アクセス）

² 同社ウェブサイトで過去のバックナンバーが読むことができるが、第5号(2015年3月)以降は更新されていない。

<http://www.iloveyangon.info/backnumber.html>（2023年3月31日最終アクセス）

³ ハローヤンゴン(クラウンライン)ウェブサイト

<https://incn.crownline.jp/media/helloyangon/>（2023年3月31日最終アクセス）

CEO) である⁴。2014年11月にはミャンマー語版の発行も開始している。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行と政変の影響を受けて、2021年5月より休刊中である⁵。

6月には、『Myanmar Japon/ミャンマー・ジャポン』が創刊された（出版地ヤンゴン、天地30cm、冊子体、創刊号の発行部数は10,000部）。ヤンゴン市内の飲食店、ホテル、日系企業オフィス、ヤンゴン国際空港、日本貿易振興機構（ジェトロ）、日本国内のミャンマー関連機関など100か所以上で配布されている。内容は、ビジネスニュースダイジェスト、特集用心！ミャンマー暮らし、TOP対談「ミャンマーの先輩に問う！」、使える！ミャンジャポ特製MAP（ヤンゴン地域、ダウンタウン周辺）、Myanmar news scrap、今月の不動産情報、Pick Up!「日本料理」、ミャンジャポクラシファイドヤンゴン日本人学校便り、厳選お役立ちページLISTINGである（創刊号目次より）。発行者は、Myanmar Japon Co., Ltdである。もともとは『Myanmar Japon』というタイトルで発行されたが、『Myanmar Japon Businee』、『MJビジネス』というタイトルに変更され、2021年12月の102号から元の名称に戻った。現在も発行中で、最新記事はウェブサイトにて無料公開されている⁶。

2014年には、『KANARAY/カナリー』と『ミャンガイ』の2誌が創刊されている。

『KANARAY/カナリー』は、1月に創刊された（出版地不明、天地26cm、冊子体、隔月発行）。ヤンゴン市内のホテル、レストラン、飲食店や公共機関等、日本国内、バンコクに設置された。日本語をベースにしながらも、日本語記事の英訳や、英語のオリジナル記事も掲載している。内容は、経済ニュース、ヤンゴンの地図、現地社会の文化紹介、スポーツ（ミャンマーのスポーツ事情、ヤンゴンのゴルフ場）、料理、ミャンマーの占い、美容、シャン州の食文化、ミャンマー女性の紹介「マドンナを探せ!」、ミャンマーのバス情報、ミャンマーレストラン、かんたん！ミャンマー語教室、SOS Information、読者限定クーポン等である（創刊号の目次より）。『KANARAY/カナリー』は、北インド・南インドエリアで発行している月刊誌『Chalo』の姉妹誌である。

また、6月には『ミャンガイ』も創刊された（出版地ヤンゴン、天地19cm、冊子体、2014年11月号の発行部数は3,500部）。掲載内容は、バスで行くゴールドンロック、水中パゴダへの旅、話題のニュータウンSTAR CITYなどである（2014年11月号の特集より）。著作編集は、ヤンゴンで江戸鮎/EDO ZUSHIを運営するSagittarius Myanmarで、ヤンゴン市内のレストラン、ホテル、企業で配布された。しかし、次に

⁴ 同誌が2016年10月までに掲載した巻頭エッセイと、各界の女性対談シリーズについては、編集長兼CEOの栗原氏が記した以下の資料で確認できる。

栗原富雄. 2016、『ミャンマー—[Yangon Press]で読み取る現実と真実』東京:人間の科学新社。

⁵ READYFOR「ミャンマー発の日系情報誌「Yangon Press」への支援基金
<https://readyfor.jp/projects/67453> (2023年3月31日 最終アクセス)

⁶ <https://myanmarjapon.com/> (2023年3月31日最終アクセス)

Myanmar Japon Co., Ltdは、2014年9日にミャンマー人富裕層向けの英語フリーペーパーとして、『Myanmar Japon +Plus』を、2017年10月に『MJビジネス バンコク版』を発行している。

紹介する『「Myan Myan」GUIDEBOOK』に吸収された。

2015年2月に創刊されたのが、月刊誌『「Myan Myan」GUIDEBOOK』である（出版地ヤンゴン、天地30cm、第2号の発行部数は5,000部）。発行者はMaeken Myanmarで、日本語版とミャンマー語版が発行されている。配布場所は、ホテル、飲食店、空港などであった。掲載内容は、ニュース（We Are Open-ニューオープンのお店情報）、食事（HOT! SHOP NEWS-藤の坊Fujinobo ヤンゴンの食リスト、ミャンマー料理店、日本料理店）、生活（ヤンゴン本当にあった こわいはなし、ヤンゴン留学生日記、Umeのどんどんどん日記）、トラベル（ヤンゴン主要エリアガイド、あごピンよろず日誌、全20ページ！ヤンゴンお役立ちマップ）などである（第2号の目次より）。現在も発行継続中なのか不明だが、2つあるFacebookのアカウントはどちらも更新を停止している。

最後に、2017年3月に創刊された月刊誌が『ミャンジャポ！』である（変形B4、冊子体、創刊号の発行部数は8,000部）。発行者は『Myanmar Japon/ミャンマー・ジャポニ』と同じMyanmar Japon Co., Ltdであり、ヤンゴン国際空港、在ミャンマー日本大使館、ジェトロ、JICA、日本人在住のコンドミニアム、サービスアパートメント、有名ホテル、人気レストランなどで配布された。内容は、The premium hotel パークロイヤル ヤンゴン、Yangon gourmet report Yhet's Sushi & Soba、シートウー&ティンザーの使える！ミャンマー語教室、エンタメニュース！、「すわじゅん」の歌い手奮闘 おいしいローカルレストラン ミャンマー”カウンデー”フード、ミャンジャポ特製MAP（ヤンゴン全域、シュエダゴン・パゴダ〜インヤー湖南、ヤンゴン ダウンタウン、ティワラ周辺）、用途別ヤンゴンレストランリスト、パーゴルフ、速水先生の健康ミャンマー料理レシピ、大雄会伊藤先生が丁寧に解説！ミャンマー医療事情Q&A、クラシファイド、厳選お役立ちページLISTINGなどである（創刊号目次より）。2018年11月発行の第11号をもって廃刊となり、『MJビジネス（現ミャンマー・ジャポニ）』に吸収合併された。

このように、民政移管から少し経った2013年以降、日本語フリーペーパーの創刊が目立った。明らかに、これは読者となる在留邦人の増加に伴うものであろうが、2015年頃にはフリーペーパーの「創刊バブル」は落ち着き、その後は発行停止や休刊が相次いだ。本稿の執筆時点（2023年3月末）で、継続的な発行を確認できるものは、『MYANMAR JAPON/ミャンマー・ジャポニ』のみである。加えて、2020年3月下旬からミャンマーでも流行が始まった新型コロナウイルス感染症と、2021年2月1日に起こった政変の影響を受けて、在留邦人数は減少に転じ、2022年10月1日時点で2,388人まで落ち込んだ。日本人コミュニティ全体が縮小し、読者数が減ったことを踏まえると、フリーペーパーの新刊や復刊が起こるには、いましばらく時間がかかりそうである。